

もう一度、空を見上げるために
学校法人大隅記念早稲田佐賀学園早稲田大学系属早稲田佐賀中学校 3年
板垣 仁菜

「もう、おわりだ」そう思う瞬間があつて。それは、心が弱いからでなく、愛する家族を守っているからこそ、絶望に打ちのめされることが起きてしまう。だけどそんな時、それでも、生きて夢を目指すことだけは保障されている。それが、どんなに人を救うのか、それがどんなにか連鎖して、多くの不幸を止めるのか、多く的人是きと、気づかずに生きていこう。だから、必要に迫られるまで、そんな保障は税金の無駄だと抗議する声も耳にする。確かに、保障を受けずに済めば幸せなのかもしれない。だが、その闇はすぐ隣にあつて、いつ誰に訪れるのかも分からないのに。闇に覆われた時に、最後の希望の光を自らが消すことがないように。私達は、予期せぬ何かを恐れ、見えない支えに感謝しなければならないだろう。二〇二〇年、私達はそのことを深く教えられた日々を迎えている。

二〇一九年十二月、謎の新型ウイルスが他国に出現した時、その闇が数月後にもっと大きな闇になって、自分の現実を変えていくなど想像していた人がどれだけいたろう。

二〇二〇年四月緊急事態宣言が発令され、学校に行けなくなった。毎日通える場所があることがどんなに幸せであったかを思い知った。それだけでない。私達がどんな時も教育を受けられるように、各地で授業のオンライン化が検討されている。私達の毎日を税金が支えていることを実感した。経済は低迷し、休業者・失業者が増加したが、雇用保険の拡充や特別給付が連日報道されていた。そして、他国で容易に医療にアクセスできない人々が亡くなっている現実を目の当たりにし、国民皆保険という日本の制度が当たり前でなく、手厚い保障であること、税金が支える医療制度が私達の健康を守ってくれている有難さを痛感した。さらにはワクチンや治療薬という命を守る最後の希望の光すら、税金が支えている。ついには、高騰するマスクや消毒液、店から消えるトイレットペーパー、いつもと違う物にお金を費やした私達一人一人に10万が給付された。それは、見えない税金を目にした瞬間だった。

税金って何？公民や現代社会をただ淡々と他人事のように聞いていた自分が、今その闇にいて、税金が自分の毎日を支えていることを実感し、深く感謝している。同時に、今後税金を納めていく責任も強く感じている。

だから、今。私達はこの闇を抜けるために、その光を支える税金を学び、税金を納め、適切な活用を考えなければならない。予期せぬ苦境を迎えても、誰もが希望を持って生きられるように、最後の砦を担う税金を深く知らねばならない。どんな時も、誰もが、もう一度空を見上げることができるように、税金を運用する。それは予期せぬ今の苦境を乗り越えた私達にしか語りすることができない大切な教訓だと思うのです。